

よせじま
寄島遺跡

所在地 安城市小川町
(北緯34度54分34秒 東経137度05分45秒)

調査理由 中小河川改良工事(鹿乗川)

調査期間 平成19年10月～平成20年3月

調査面積 3,465㎡

担当者 宮腰健司・松田 訓・岡久雅浩



調査地点 (1/2.5万「安城西尾」)

調査の経過 発掘調査は、愛知県建設部河川課による鹿乗川河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成19年10月から平成20年3月にかけて実施した。調査面積は3,465㎡であり、全体をA・B・Cの3調査区に分けて調査を行った。

立地と環境 寄島遺跡は、鹿乗川東岸の標高7mの沖積地に広がる鹿乗川流域の遺跡の一つである。周辺には弥生時代から戦国時代の遺跡が集中する。北には姫下遺跡、南には下懸遺跡があり、寄島遺跡はその間の地域を範囲とすると考えられる。また、この地域の鹿乗川沿岸は碧海台地の縁辺部にあたり、遺跡のある沖積地との比高は約4mある。周辺の台地上にはその縁に沿うように、やや北に姫小川古墳・姫塚古墳・獅子塚古墳などがあり、この遺跡の対岸に位置する加美古墳や同じ沖積地上の八ッ塚古墳(滅失)なども含めた桜井古墳群が展開している。

調査の概要 今回の調査では、全調査区で古墳時代初期から前期の集落及び墓域を想定できる遺構が確認された。出土遺物もその時期の古式土師器が中心であるが、全体的に量が少ないうえに破片が多く、器形が明瞭なものはあまり出土していない。また、全ての調査区で古墳時代の包含層の上位層において須恵器・灰釉陶器などの陶器類が少量ずつ出土したが、どの調査区でもそれらの時期の明瞭な遺構は確認されなかった。A・B区では耕作土直下で少数の溝や土坑を確認したが、それらはB区で確認された江戸時代中頃の溝以外はどれも時期不明のものであった。この地域は近世以降耕作地として長年利用されてきたため、古代以降の遺構はほとんど失われてしまったと考えられる。

古墳時代初期から前期の集落

A・B区及びC区最北部で堅穴住居跡と考えられる遺構を50棟ほど確認した。これらの住居跡では、生活面に明瞭な炭化物・焼土の広がりが見られる中に遺物が散布しているものや、明瞭な柱穴が残るものも多く確認されたが、大半は後世の削平により上部が失われ、方形の辺が認められる程度の状況であった。また、今回の調査では、堅穴住居の中央部をテーブル状に残して周囲を1mほどの幅の溝状に一度掘り下げてから床面を張っている幅の広い溝が廻る住居も12棟確認された。このような住居跡がまとまって確認されたことはあまりなくこの遺跡の特徴の一つともいえるが、こうした住居がどのような目的で作られたのかは不明であり、さらなる検討が必要である。この他、A・B区では縦横に走る溝や土坑が多数確認された。これらの一部は出土遺物から住居跡とほぼ同時期とわかるものもあったが、多くは時期不明である。また、これらの溝や土坑の性格も不明である。

今回の調査では、全調査区で遺構の密度が高い箇所をそれぞれ上面と下面とに分けて掘削したが、遺構の時期的には上・下面とも同時期かやや下面が先行する程度と考えられる。出土遺物の形式変化からすると、B区及びC区最北部域の方がやや古く、A区の中央より北側の方が新しい傾向がある。

古墳時代初期から前期の墓域

最南部のC区では、住居跡と考えられる遺構は北部で2棟確認された以外は認められず、かわって明瞭な形の方形周溝墓が2基確認された。これらの方形周溝墓は、主体部は後世の削平により失われていたが、調査区内で方形に屈曲する周溝部が明瞭に残っていた。この周溝部からの出土遺物は少量で時期決定は難しいが、これらの方形周溝墓もどちらも古墳時代初期から古墳時代前期頃のものであると考えられた。さらに、C区の最南部には幅が約11mあり、ほぼ直角に屈曲する浅い大溝が確認された。この大溝の性格は今のところ不明であるが、内側に斑土状の堆積の痕跡が認められることから、墳墓の周溝の可能性も考えられる。この大溝からの出土遺物も非常に少なく時期決定は難しいが、限られた資料から古墳時代前期頃のものとして推測された。

この他、C区では方形周溝墓に切られる北西—南東方向に平行する畝状の多数の溝が確認された。これらの溝は遺物をほとんど含まず、時期・性格ともに不明である。また、南部の大溝内側の斑土状の堆積の下位層より数本の溝といくつかの土坑が確認されたが、遺物の出土はほとんどなく、遺物が出土した古墳時代初期の土坑以外はどれも時期・性格ともに不明である。

ま と め 今回の調査の結果から、空間的には概ねA・B区域は古墳時代初期から古墳時代前期頃までは集落域であり、これに対して最南部のC区域は墓域であったと考えられる。しかし、この区分けも明確にできるものではなく、集落域は一定であったわけではなく時期的な変遷があると推測される。集落域の移動にともなって南部が墓域化したとも考えられる。今回の調査では全体として良好な出土遺物が少なく、現時点では遺跡全体の時期的な変遷を判断するには至っていない。しかし、発掘された遺構群の状況から、この地域では古墳時代初期から前期にかけてある程度の規模の集落が継続的に展開していたと考えることができる。この遺跡の位置付けについては、周辺の諸遺跡との関連のなかで検討していく必要がある。

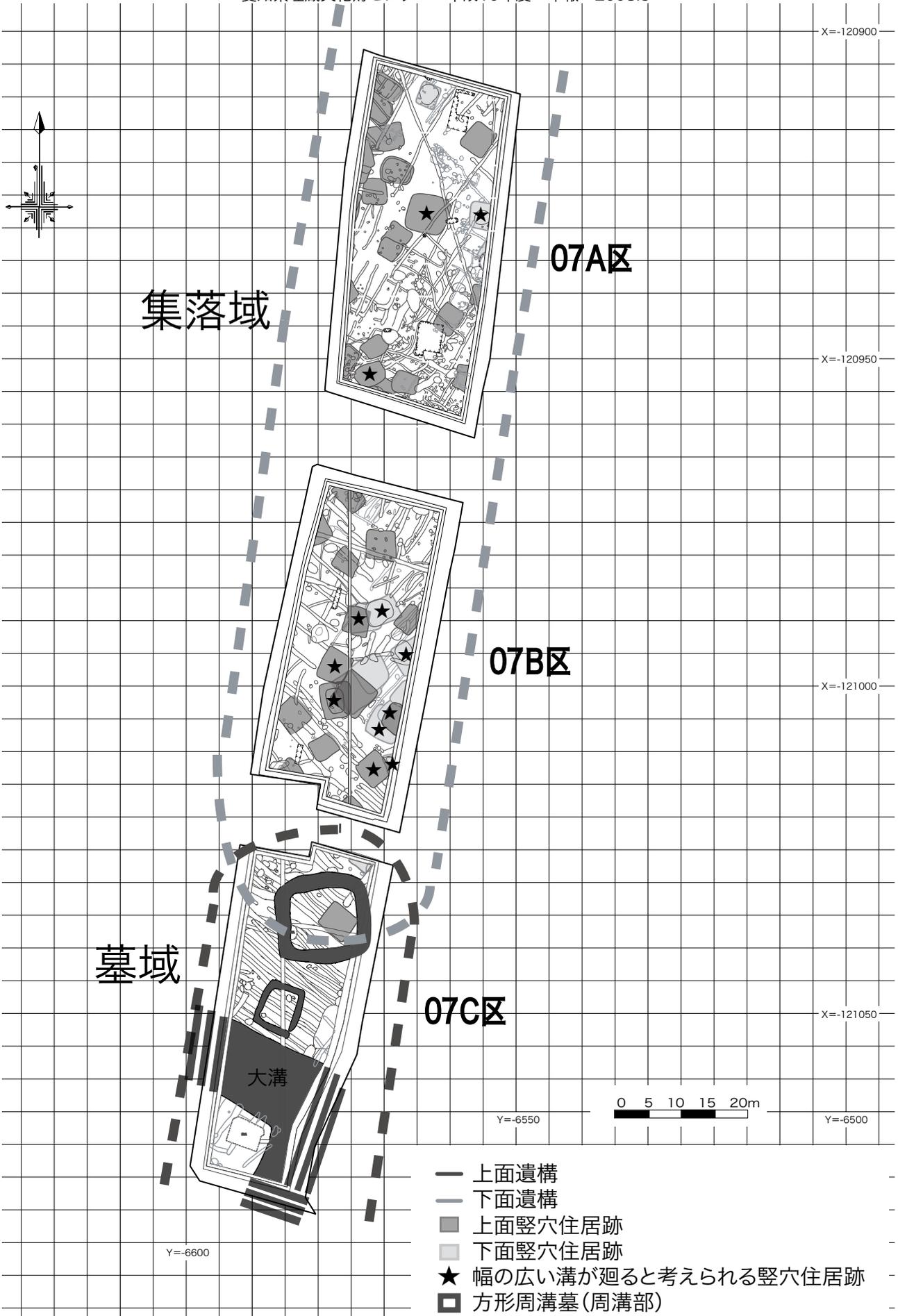
(岡久雅浩)



調査区遠景(南から)



調査区遠景(東から)



寄島遺跡主要遺構配置図 (1 / 800)



A区全景(北から)



A区1113SB



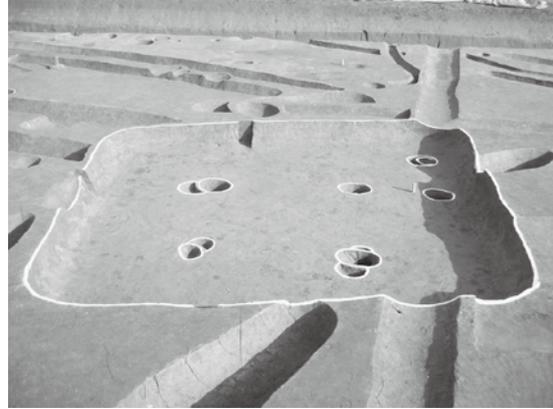
A区1545SB土器出土状態



B区全景(北から)



B区竪穴住居跡検出状況



B区2034SB



C区全景(北から)



C区3001SD(大溝)